

「立ち上がるトポス」

舞踊家、桜美林大学准教授
木佐貫邦子



◆ ダンサーにとってのトポス

ダンサーにとっての「トポス」と言えば、まず思い浮かぶのはやはり劇場です。しかし、舞台上に身体を乗せるまでには、まず別のトポスに身を置いて準備する、というのはよくあることです。それが稽古場ですね。多くのダンサーたちは、劇場で踊る事を前提に稽古場であらゆる事を試みる訳です。一口に稽古場と言ってもそこは具体的なトポスでもあり、また非常に抽象的なトポスでもあると言えます。どういう事かと申しますと、これはあくまでもダンサーとしての感覚に基づく見地によるものですけれど、まず具体的なトポスとしての稽古場というのは、現在の「ココ」としての稽古場という意味です。ワープできない肉体がまさしく置かれた「ココ」としての…という事ですね。そこでわりと最近の体験を例にあげたいと思います。

◆ 具体的なトポス、抽象的なトポス

この夏に私は、黒沢美香とデュオ（2007. 8/30, 31, 9/1 シアタートラム「約束の船」）を踊ったのですが、その時の事をお話したいと思います。その稽古は、黒沢さんの自宅の稽古場で行われました。私達が設定したある一場面では我々二人は交互にある地点に立つのですが、それは稽古場と言うとちょうど正面の窓のすぐそばで、方向は窓の方です。そこへたどり着くと、外からの風が心地よく頬をかすめます。今年の夏はご承知の通りものすごい猛暑でしたから、時折出会える外からの風は何よりのご褒美でした。ある日の稽古はそんな暑い真昼間に行われました。窓の方を向いて立つとお隣のアパートのベランダで、干した布団をたたき奥さんが見えます。もちろん布団をたたき音も聞こえます。蟬の鳴く声も。そこへ別の建物から、女の人が携帯電話でしゃべりながら現れます。「～ちゃんに連絡しといてね…」とかんとか言いながら…。これがその時の現実の「ココ」の様子です。つまりそんな様子である所の「ココ」に私は立っていたのです。また、ある日の稽古は夜半に行われました。いつもの窓の方向に立っても外の様子はほとんど見えません。窓の棧に止まったカナブンはジッとしています。その時、突

然ザァーッと激しく雨が降り出しました。私達はそんな雨の音を聞きながら踊っていました。雨音とセッションです。この夜はそんな現在のトポスに身を置いていた事になります。これは余談ですが、あとから黒沢美香が「クニちゃん、このシーン、雨の音もいいね!」と言ったものです。偶然の産物です。しかし実際には雨音はこの日だけのスペシャルライブとなりましたけれど…。黒沢美香は時々「誰も（スタッフも）見ていない時に、もっともいいダンスが立ち上がる事がある」と言います。そしてこんな事も…。「ねえクニちゃん、今日のは誰にも見られなくてよかったね。見せるにはもったいない…。」

さて、稽古場で踊る私や黒沢美香は実はもうひとつのダンスの場所に身を置いています。それは、この場合なら二人が想定した架空の棧橋です。これが稽古場における抽象的なトポスという事になります。しかしこれもあえて名付ければ「棧橋」となりますが、このトポスには実体はなく常に揺れていて、とらえどころのないものである事は否めません。それはつまり踊って見ないとわからないからです。踊ったあげくに獲得できるかどうか、保障のないトポスなのです。私達は踊って行き着く先の感覚を踊る以前にイメージする事はよくあります。しかし必ずしもイメージ通りのところへたどり着けるとは限らない…という事も知っています。これを私は稽古場における抽象的なトポスと感ずるのです。そしてこの抽象性は他でもない、具体的なトポスによって支えられていると言えると思います。実際お隣さんの布団をたたき音や突然降り出した雨の音を聞きながら窓の方向を向いて立たなければ獲得できない「場所」なのです。抽象的なトポスというのはたとえ瞑想しても出会えないという事です。

◆ 劇場というトポス

ここまで考えてみても我々ダンサーは既に二つのトポスを行ったり来たりしていると言えます。しかもそれはもうひとつのトポスである「劇場」を前提にしているのですからややこしい。言うまでもなくこの劇場と言うトポスにおいても稽古場と同じ構造が考えられます。具体と抽象の二つのトポスです。黒沢美香と踊った「約束の船」は世田谷のシアタートラムという劇場で行われました。舞台奥には深紅の鉄製の扉があり、今回私達はこの扉をむき出しにして使いました。そしてこの深紅の扉の方向は稽古場と言う所の窓の方向です。いよいよ今度は劇場における具体を体感しながら仮想する棧橋に立つという事です。つまりここでも二カ所のトポスに身を置く事になります。ところが稽古場におけるトポスの経験があるため、その経験を得た身体性というものを考えますと、単

純に二カ所×2＝四カ所とはいかない、というのが私の正直な感想です。もっともっと増幅した身体のトポスを感じたように思えるからです。その一つの理由としては、身体には記憶する機能があるということ。身体における記憶はまるでお菓子のミルフィーユのように重なりあっているように思います。ですからシアターラムにおいて立った仮想の棧橋というトポスは、その日の深紅の扉の前というだけのトポスにはとどまらず、その夏に味わったいろいろな出来事を内包するたくさんのトポスのミルフィーユであったのだろうと考えられます。

◆ 自然というトポス

劇場のように踊られたり演じられたりする事を前提に、その事を待ち構えるという場所がある一方で、それらの事など全く前提としない、という場所もあると思います。例えば自然界のそのままの場所ですね。そこで人が踊ろうと踊るまいと何も変わらない場所…。私はある企画で大谷石の採石場で短いダンスを踊りました。（この採石場も実は自然のそのままの姿という訳ではありませんが…。人の手が入っています。）その場所は自然光が差し込み、ほとんど動き回るスペースはなく、足場は悪く、ゆっくりゆっくりといくつかのポーズをとるのが精一杯という、そんな場所でした。この時につくづく思い知らされたものです。前もってああやろう、こうやろうと計画していても思い通りにはいかないケースというのものもあるものだなあ…。どうにかこれならできます、こんな事ならやれます、とその場で即興的に工夫してやるしかありません。しかし、今になって思いますと、実はこの時程トポスと身体が一体化した状態にあったことはないように思うのです。ある意味他のトポスは存在しない、ということです。存在しないというよりむしろ存在させようがない、現場オンリーという事です。

大谷石の採石場に限らず、自然を相手に踊る時、実にそのトポスの力に翻弄されます。そのトポスの力を借り、取込み、身を委ねてこそ自然というトポスにおけるダンスは成立するのだろうと思います。そしてもう一つ厄介な事は、案外それがダンサーにとって心地よいという事実です。一見翻弄されているようであっても、結局身を任せれば楽になるのです。雨に少しだけ濡れるよりいっその事ずぶ濡れになってしまう方が楽な気分になるのと同じです。しかし私はこの楽だけはしてはいけないと自分に言い聞かせるのです。ですから私は自然を相手に踊る事はなるべく避けたいとすら思っています。なぜなら身を委ねてしまいたくなる自分がいて、そのことがどうしても許せないからです（笑）

◆ 第二の人生としてのトポス

劇場として作られた劇場以外にも元々～と言うような劇場というものがありますね。元倉庫だったり、元工場だったり。その本来の役目を終えても、壊してしまわずに、文化的な新しい役割を担って甦らす、というケースがヨーロッパなどではよくあるようですね。その理由の一つには、建物自体が石造りである事、そしてもう一つ、残すという意識の高さが鍵のように思われます。日本でもこのごろはそのような動きが出て来ていると思います。私は元監獄だったという劇場で踊った経験があります。それはオーストラリアのシドニーにあるセルブロックシアターという劇場です。元監獄が美術の専門学校になっていて、センターには監視塔もあり建物は放射線状に広がって建っていました。そのうちの一棟が劇場です。建物はレンガ造りで舞台の奥の壁もまさしくすんだレンガ色でした。その時に持って行った作品は「てふてふ六」というもので（'85初演ラフォーレミュージアム赤坂）随分といろいろな所で公演させて頂いたソロ作品なんですけど、この作品の舞台美術はボロボロの布で出来ていて、まるで難破船の帆のような風采で舞台の後方に斜めにつり下げの形で飾るものでした。色は茶系のグラデーションだったのですが、このセルブロックシアターのくすんだレンガ色は見事にマッチしたのです。まるでこの作品のためにわざわざしつらえたみたいにぴったりでした。このような舞台背景が、まさか海を渡ったシドニーとやらで完成するとは夢にも思いませんでした。色合いがマッチしたというのも本当の事ですが、それ以上にこの壁に染み付いている時間の蓄積が醸し出す雰囲気は何とも言いがたく、それは計算して生み出されるものではないと感じさせられるものだったのです。役割を終え、しかしずっしりと漂う存在感は、現在の身体の挑戦を受け止め、新しい姿としてのトポスを示してくれたのではないかと思います。

それにしてもこの建物が監獄として働いていた頃には、長い時を経たのちに、まさか東洋から来た一人のダンサーの踊る身体を背後から包み囲む事になろうとは、その壁もそして他の誰もが想像していなかった事だろうと思います。これもまた立ち上がるトポスの形ではないかと思えてくるのです。そう考えますと、ダンスにおけるトポスというのは、固定された現場という概念に加え、立ち上がって来るものである、という気がして来ます。身体によって立ち上がるトポスを獲得する為に、私はダンスをやってきたのかしら、と思えて来ました。そこで初めて“本来トポスとは論理の行き着く先のことである”という意味が少し理解できる気がするのです。